

## 研究課題別事後評価結果

1. 研究課題名： 計算機によって多様性を実現する社会に向けた超 AI 基盤に基づく空間視聴触覚技術の社会実装

2. 研究代表者名及び主たる研究参加者名（研究機関名・職名は研究参加期間終了時点）

研究代表者

落合 陽一（筑波大学図書館情報メディア系 准教授）

主たる共同研究者

菅野 裕介（大阪大学情報科学研究科 マルチメディア工学専攻 准教授）

遠藤 謙（(株) ソニーコンピュータサイエンス研究所 リサーチャー）

本多 達也（富士通（株）マーケティング戦略本部）

3. 事後評価結果

○評点：

A 期待通りの成果が得られている
------------------

○総合評価コメント：

多様性社会を「人種・性別・年齢・障害に関係なく、すべての人々が自分の能力を活かしていきいきと働ける社会」と定義し、この実現に向けて、高齢化や何らかの理由により低下もしくは失われてしまった身体や感覚器の機能を補完するハードウェアおよびソフトウェアの研究開発を行った。

網膜投影ディスプレイ、画像認識タスクの学習データを増加させるための GAN による画像生成技術、日常生活で利用できるロボット義肢技術といった要素技術の開発に加えて、聴覚障がい者自身が「Antenna」を用いた音認識の機能を開発するワークショップを行うなど実際のニーズを拾うための実証研究活動も多く行っている。本 CREST 研究は、多くの人々によりそった問題解決の仕組み作りを目指すプロジェクト「xDiversity」として推進され、その母体となる一般社団法人が 2018 年 11 月に設立されている。科学技術の推進とそれを利用するコミュニティの形成を行なっているところを評価したい。

本研究は、高度化された義肢、車椅子、聴覚補助という個々の要素技術の達成度ではなく、「人と機械を統合的に捉え身体的・能力的困難さを克服する」という志とその実現能力をもって評価した。AI/IoT の技術発達により社会的弱者がもはや弱者ではなく、多様な才能が生かされる社会となることをビジョンとして、そのための AI、機械はどうあるべきか、それらと人のインタフェースはどうあるべきかを探求することに邁進してもらいたい。